

赤シートを使って暗記・確認用にご利用して下さい。

※各傍線は **重要漢字・表現**、**重要**、**句形** を表す※

>

驪山にある離宮の高いところは青雲の中に入り、

驪宮 高き 処 青雲に入り

ゆつたりとしたリズムの歌や舞。管絃はゆるやかに演奏されて、

緩歌 緩舞 糸竹を凝らし

漁陽の攻め太鼓の音が大地を振動させて届いてきて、

漁陽の 鞞鼓地を 動して 来たり

天子の宮城には戦火によって煙や塵がまきおこり、

九重の 城 闕 烟塵 生じ

翡翠の羽根で飾った天子の御旗はゆらゆらと揺れ動き、進んではまた止まる

翠華 揺揺として 行きて 復た 止まる

天子の軍隊は出発しようとせず、どうすることもできない

六軍 発せず 奈何とも する 無く

螺細工の花の首飾りは地に捨てられたまま誰も拾う者がなく、

花鈿は地に委てられて人の収むる無く

天子は手で顔をおおって、救うこともできない

君王 面を 掩ひて 救ひ 得ず

黄色い砂塵があたりに立ちこめ、風がもの寂しげに吹いていた

黄埃 散漫 風 蕭索

峨眉山のふもととは道行く人もほとんどなく、

峨嵋山下 人の 行くこと 少に

蜀の地を流れる川の水は緑色に澄んで、蜀の地にそびえる山は青く連なり、

蜀江は 水碧に 蜀山は 青く

仮の宮殿で月を見ると、その色に胸をしめつけられ、

行宮に 月を見れば 傷心の色

天下の情勢が大きく変わり、天子は都へ戻られることになった

天旋り 日転じて 竜馭を 廻らす

馬嵬の坂のあたり、泥の中に

馬嵬 坂の下 泥土の中

※読解に際して注意すべき点等※

・原則として読みは全て暗唱する。歴史的仮名遣いにも注意。

・「同一物を示す表現」をしっかりと覚えておく。例えば「蛾眉」も「玉顔」も共に「楊貴妃」の意。

・「奈何」は「いかん」で方法、手段。「何奈（いかん）」は状態。「不能△」は不可能。「△する」ができない。読み「あたはず」。※慌てて作ったのでミスを含むものと思われませんが了承ください。

素晴らしい音楽が風に乗ってあちこちから聞こえてくる

仙楽 風に 飄りて 処処に 聞こゆ

一日中、天子はいくら眺めても飽きることがない

尽日 君王 看れども 足かず

霓裳羽衣の曲を驚かし打ち碎いた

驚破す 霓裳 羽衣の 曲

多数の車・騎兵の天子の軍隊は西南の地に落ちのびた

千乗 万騎 西南 に行く

長安の都の門を出て西へ百余里の所（の馬嵬に着いた）

西のかた 都門を 出づること 百余里

すんなりした美しい眉の人は馬の前で死んでいった

宛転たる 蛾眉 馬前に 死す

翡翠の羽の髪飾りも雀の形の金のかんざしも玉製の簪も

翠翹 金雀 玉搔頭

振り返って見つめる顔には、血と涙が入り混じり流れた

廻り 見て 血涙 相和して 流る

高く雲に入る棧道は曲がりくねり劍閣山を登っていく

雲棧 縈紆 劍閣に 登る

天子の所在を示す旗に輝きなく、太陽の光までが薄れいた

旌旗 光無く 日色 薄し

天子は朝な夕なに楊貴妃のことを思う

聖主 朝 朝暮暮の 情

夜の雨に鈴の音を聞くと、腸を断ち切られる思いがする

夜雨に 鈴を 聞けば 腸断の 声

（二）馬嵬まで来ると心ひかれてためらい、立ち去れない

此に 到り 躊躇して 去る 能はず

美しい顔は見えず、死んだ場所だけが空しく残っている

玉顔を見ず 空しく 死せし 処

赤シートを使って暗記・確認用にご利用ください。

各傍線は 翻語漢字・表現 重要 句形 を表す

天子と臣下は互いに(死)場所を(顧みて、
みな涙で衣を濡らし、
君臣相顧みて 尽く衣を濡し
帰って来る池も庭もみな昔の昔まである
帰り来たれば池苑皆旧に依る

はすの花は(楊貴妃の)顔のまゆげ 柳の葉は眉のまゆげである

芙蓉は面のうつくしく柳は眉のうつくしく

春風が吹き桃とすももの花が開く夜

春風桃李花開く夜

(皇帝の住居であった)西宮 南苑には秋草が茂り

西宮南苑秋草多く

かつて梨園にいた歌舞芸人たちは白髪が目立つようになり

梨園の弟子白髪新たに

夜の宮殿に虫が飛び、わびしく物思いにふけり

夕殿に虫飛びて思ひ悄然

遅々として進まない鐘鼓に、初めて夜が長く感じられる

遅遅たる鐘鼓初めて長き夜

おどろおどろの形の瓦は冷ややかで 霜が重く降りてこて

鴛鴦の瓦冷ややかにして霜華重く

遙か遠く隔てられた生と死 別れから幾年かが過ぎた

悠悠たる生死別れて年を経たり

東方の都の門を望み 馬の歩みに任せて帰る

東のかた都門を望み馬に信せて帰る

太液池のはすの花 未央宮の柳

太液の芙蓉未央の柳

これを前にして涙が流れないだろうか いや、号泣だ

此れに対して如何ぞ涙垂れらる

秋の雨が降ってもおきりの葉が落ちる時

秋雨梧桐葉落する時

宮殿の落ち葉が階段を覆い、紅の葉は掃き取られることもない

宮葉階に満ちて紅掃はず

皇后の部屋に仕えた女官も若々しい美しさが衰えてしまった

椒房の阿監青娥老いたり

ただ一つの灯火の芯を引き出して明るく、まだ眠りにつけない

孤灯挑げ尽くして未だ眠りを成はず

明るい銀河に、夜が明けようとしていることを知る

耿耿たる星河曙けんと欲する天

翡翠の刺繍の寝具は寒く誰と夜を共にしつか誰とも共にすべきない

翡翠の衾寒くして誰と共にせと

(彼女の)魂は一度とつて夢に現われることはない

魂魄曾て来たりて夢に入らず

註解に際して注意すべき点等

「灰へ」「は」「う」「う」「へ」「全し・残りも」。

「如何不A」「は又語」「いかんぞA(せ)むひと」「へ」「ひ」してA(せ)むひとがあらうか いや、A(せ)むひとではいらぬぞ」。

「新たに」「は」最近になって急に「の意」「悄然」「は」「わびしく様」を表す。

「未A」「は」再読文字で「いまたA(せ)す」「。」「またA(せ)ない・べきない」「。」「」は「いつまでも眠れぬ」の意

「曾A」「は」「かつてA(す)で」「今非でA(した)」「て」が「(め)」「打消の」「不」を伴っているから「今非で一度もA(し)ない」。

慌てて作ったのデジミスをを今非ものと強わりますが承知ください。

赤シートを使って暗記・確認用にご利用して下さい。

※各傍線は 重要漢字・表現 重要 句形 を表す※

臨邛の道士で長安に旅人として来ている者があつた

りんきょう どうしこうと

臨邛の道士鴻都の客

(道士は) 天子の夜も寝られず楊貴妃を想う心に感じ入つて

くんおうてん おも かん ため

君王展転の思ひに感ずるが為に

大空を押し開き大気に乗ってかける様子は稲妻のよう

くう はい き ぎよ はし いなづま

空を排し気を馭して奔ること 電のごとく

上は天上をくまなく探し下は地下を探し尽くしたが

うへ へきらく きは した こうせん

上は碧落を窮め下は黄泉

その時突然こんなことを聞いた、海上に仙人の山があり

たちま き かいじょう せんざんあ

忽ち聞く海上に仙山有り

楼閣は透明に輝いて五色の美しい雲がわき起こり

ろうかく れいろう

楼閣は玲瓏として五雲起こり

その中に一人、字を玉真という者がいる

なか いちにんあ あざな ぎよくしん

中に一人有り字は玉真

黄金の宮殿の西側の御殿に至り、玉製の扉を叩き

きんけつ せいしやう ぎよくけい たた

金闕の西廂に玉扇を叩き

聞くところによると、漢の天子の使いであるという

きくなら かんかてんし つか

聞道く漢家天子の使ひなりと

衣を取り、枕を押しやり、立ち上がつて部屋の中を歩き来し

ころも と まくら お た はいかい

衣を攬り枕を推し起ちて徘徊し

豊かな髪は半ば垂れ下がらたつた今眠りから覚めた様子で

うんびんなか た あら ねむ さ

雲鬢半ば垂れて新たに睡りより覚め

風が仙女の袂を吹き上げてひらひらとひるがえり

かせ せんべい ふ ひょうやう

風は仙袂を吹きて飄飄として挙がり

真心を込めた念力を使って魂を呼び寄せることができるという

よ せいせい も こんぼく いた

能く精誠を以つて魂魄を致す

すぐさま方士に(楊貴妃の魂を)丁寧(に)求めさせた

つひ ほうし いんぎん もと

遂に方士をして殷勤(に)覓めしむ

天上に昇り地下にもぐつてこれをすみずみまで探し求めた

てん のぼ ち い これ もと あまね

天に昇り地に入りて之を求むること遍し

どちらも果てしなく広がつて、楊貴妃の魂はどこにも見えない

りようしようぼう

両処茫茫として皆見えす

山は何もない遠くぼんやりした空間にあると

やま きよむひようびよう かん あ

山は虚無縹緲の間(に)在りと

その中にはしとやかな仙女が大勢いる

そ なかしやくやく せんしおお

其の中綽約として仙子多し

雪のような白い肌、花のような美しい顔、ほとんど楊貴妃そのものである

ゆき だへはな かんばせしんし

雪の膚花の貌 参差として是れならん

侍女の小玉に伝言をして(側仕えの)双成(に)来意(を)知らせる

てん しょうぎよく そうせい ほう

転じて小玉をして双成(に)報せしむ

華麗なとばりの中、(玉真の魂は)夢からはっと目覚めた

きゆう かちようり むちゆうたばり

九華帳裏夢中驚く

真珠のすだれと銀の屏風が次から次へと開く

しほくぎんへいりい ひら

珠箔銀屏邏迤として開く

美しい冠もきちんと整えず広間を降りてくる

かかんとこの

花冠整へず堂を下り来たる

まるで霓裳羽衣の舞のようである

な げいしよううい まい に

猶ほ霓裳羽衣の舞に似たり

※読解に際して注意すべき点等※

・「能」は副詞「よく」動詞「あたふ」で共に可能「〜することができ」。「致す」は「呼び寄せる」の意で同系は「誘致」など。

・『之を求むること…』の『之』は何か、詩中より漢字二字で抜き出せ」とか。探したのは魂だから「魂魄」を抜き出す。

・「AをしてBしむ」は使役。「AにBさせる」。基本。「遂に」は「すぐに」、「忽ち」は「突然」、「新たに」は「たつた今くしたばかり」。

・「猶ほ〜」は比況で「まるで〜のようだ」。如(ごとし)を伴うことも単独で用いることも。また「如」単独の場合もある。(七九句)

・その他、形容詞は本番で脚注が期待できなくもないが、できればひと通り暗記しておきたい。

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

※各傍線は **重要漢字・表現** **重要** **句形** を表す※

美しい顔は寂しげで涙がとめどなく流れる

ぎよくようせきばくなみだらんかん

玉容寂寞 涙 欄干

思いをこめ、瞳をこらして天子に、**挨拶**申し上げる

じよう ふく ひとみ こ

情を含み 睇を凝らして 君王に謝す

じよう ふく ひとみ こ

昭陽殿でいただいた **寵愛**は断ち切られ

しょうようでんりおんあい

昭陽殿裏恩愛絶え

振り返って下の人間世界を眺めると

こうへ めぐ

頭を廻らして下のかた人寰を望む 処

ただ**思い出**の品によって**深い真心**を表し

ただ おもひだす

唯だ 旧物を将って**深情**を表し

ただ きゅうぶを

二股の**かんざし**は一方を残し箱もふたと身の一方を残します

ふたは 二股の

釵は 一股を留め合は 一扇

ただ**(私たちの)**心を**黄金**や**らでん**のように**堅く**しておけば

ただ (わたしたちの) こころを

但だ心を**して金鈿**の**堅き**に**似しめ**ば

(使者との) 別れにあたって丁寧にもう一度伝言を託す

わか のぞ

別れに臨んで**殷勤**に重ねて 詞を寄す

「七月七日、**長生殿**で

しちがつしちじつちようせい

七月七日 長生殿

天にあつては、**どうか比翼**の鳥となり

てん あ

天に在りては願はくは**比翼**の鳥と作り

てん あ

天地は**永遠**に存在するといつてもいつか滅びる時もあるうが

てんちようち

天長地久 時有りて尽くとも

てんちようち

一枝の梨の花が、春の雨に濡れているかのようだ

りかいっしはるあめ お

梨花 一枝春雨を帯ぶ

「お別れして以来、**お声**も**お姿**もどちらも遠くぼんやりしており

いちべつおんようふた

一別音容両つながら**眇茫**

いちべつおんようふた

蓬萊宮で長い月日を送りました

ほうらいいきゅうちゅうじつげつなが

蓬萊宮 中日月長し

長安の都は見え、塵や霧が見えるばかりです

ちやうあん み

長安を見ずして**塵霧**を見る

らでん細工の箱と金のかんざしをこつつけて**持ち帰らせる**としましょう

でんこうきんさいよ

金合金釵寄せ将て去らしむ

かんざしは黄金を引きちぎり、箱はらでんの模様を分かちました

さい おうごん さきしゅう でん

釵は黄金を撃き合は鈿を分かつ

天上と人間界に別れていても必ず会えるでしょう。」と

てんじやうじんかんかなら

天上 人間会はず相見んと

その言葉の中には二人しか知らない誓いがあった

しちゆう ちか あ りようしん

詞中に誓ひ有り 両心のみ知る

夜中に人影もなくなつて二人ひそかに語り合ったとき

やはんひとな しご

夜半人無く私語の時

地上にあつては、**どうか連理**の枝となりましょう。」と

ち あ

地に在りては願はくは**連理**の枝と為らんと

ち あ

この恨みは**どこまでも**続いて尽きる時はないだろう

この恨みは

此の恨みは綿綿として尽くる期無からん

この恨みは

※読解に際して注意すべき点等※

・「梨花一枝春帯雨」、「梨の花」は中国では最上の花。これを自著の中で引用したのは清少納言。「木の花は」(三七段) 参照。

・「楊貴妃の手紙の内容を示す句はどこからどこまでか。最初と最後の五字を抜き出せ」とかいかにも聞かれそう。

・あくまでも楊貴妃(の魂)に会っているのは方士(≡使者)であつて玄宗皇帝ではない点に注意。楊貴妃と方士とのやりとり。

・作者名、作品名等は漢字で正確に答えられるようにする。「白居易(白楽天) 作」「白居易集」の「長恨歌」。最後二句でブチギレてる。

・あと押韻と対句も押さえとく。

※慌てて作ったのでミスが含まれていると思われるかもしれませんがご了承ください。

(おまけ) 長恨歌(一六六句) 押韻 対句

連続する同一の色が同一の韻。例えば「国」「色」までが「o」の韻。対句は見ての通り

漢皇重色思傾国 御宇多年求不得

楊家有女初長成 養在深閨人未識

天生麗質難自棄 一朝選在君王側

迴眸一笑百媚生 六宮粉黛無顏色

春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂

侍兒扶起嬌無力 始是新承恩沢時

雲鬢花顏金步搖 芙蓉帳暖度春宵

春宵苦短日高起 從此君王不早朝

承歡侍宴無閑暇 春從春遊夜專夜

後宮佳麗三千人 三千寵愛在一身

金屋粧成嬌侍夜 玉樓宴罷醉和春

姊妹弟兄皆列土 可憐光彩生門戶

遂令天下父母心 不重生男重生女

長恨歌（二七～二〇句）▽押韻◆对句

第一部（二七～五四句）

連続同色同韻 矢印上下对句。

驪宮高処入青雲 仙樂風飄处处聞

緩歌縵舞凝糸竹 尽日君王看不足

漁陽鼙鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲

九重城闕烟塵生 千乘万騎西南行

翠華摇摇行復止 西出都門百余里

六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死

花鈿委地無人收 翠翹金雀玉搔頭

君王掩面救不得 廻看血淚相和流

黃埃散漫風蕭索 雲棧縈紆登劍閣

峨嵋山下少人行 旌旗無光日色薄

蜀江水碧蜀山青 聖王朝朝暮暮情

行宮見月傷心色 夜雨聞鈴腸斷声

天旋日轉廻竜馭 到此躊躇不能去

馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死処

第二部（五五～七四句）

君臣相顧尽霑衣 東望都門信馬歸

歸來池苑皆依旧 太液芙蓉未央柳

芙蓉如面柳如眉 对此如何不淚垂

春風桃李花開夜 秋雨梧桐葉落時

西宮南苑多秋草 宮葉滿階紅不掃

梨園弟子白髮新 椒房阿監青娥老

夕殿螢飛思悄然 孤灯挑尽未成眠

遲遲鐘鼓初長夜 耿耿星河欲曙天

鴛鴦瓦冷霜華重 翡翠衾寒誰与共

悠悠生死別經年 魂魄不曾來入夢

第一部（七五～二〇句）

臨邛道士鴻都客 能以精誠致魂魄

為感君王展轉思 遂教方士殷勤覓

排空馭氣奔如電 昇天入地求之遍

上窮碧落下黃泉 兩処茫茫皆不見

忽聞海上有仙山 山在虛無縹緲間

樓閣玲瓏五雲起 其中綽約多仙子

中有一人字玉真 雪膚花貌參差是

金闕西廂叩玉扃 轉教小玉報双成

聞道漢家天子使 九華帳裏夢中驚

攬衣推枕起徘徊 珠箔銀屏邏迤開

雲鬢半垂新睡覺 花冠不整下堂來

風吹仙袂飄飄舉 猶似霓裳羽衣舞

玉容寂寞淚欄干 梨花一枝春帶雨

含情凝睇謝君王 一別音容兩渺茫

昭陽殿裏恩愛絕 蓬萊宮中日月長

廻頭下望人寰処 不見長安見塵霧

唯將旧物表深情 鈿合金釵寄將去

釵留一股合一扇 釵擘黃金合分鈿

但令心似金鈿堅 天上人間會相見

臨別殷勤重寄詞 詞中有誓兩心知

七月七日長生殿 夜半無人私語時

在天願作比翼鳥 在地願為連理枝

天長地久有時盡 此恨綿綿無盡期